

小学校中学年当時の家族関係が大学生の友人関係に与える影響

— 回想動的家族画を用いた検討 —

(学校教育教員養成課程) 松山 可奈

(愛媛大学教育学部) 相模 健人

Impact of family relationships in the middle grades of elementary school on friendships of university students

— Examination using kinetic family drawings —

Kana MATSUYAMA and Takehito SAGAMI

(2021年9月1日受理)

要旨 児童期や青年期における家族関係、友人関係はともに自尊感情などに影響及ぼすことが明らかになっており、その重要性も明らかとなっているが、児童期の家族関係が青年期、特に大学生の友人関係にどのように影響を与えているのかはまだ明らかになっていない。そこで、本調査ではA県内に通う大学生7名に対して、小学校中学年の頃を思い出して回想動的家族画を描いてもらい、そのうえで小学校中学年当時の家族関係・友人関係、大学生の友人関係についてインタビューした。回想動的家族画を分析し、インタビューは修正版グラウンテッド・セオリーで分析した結果、小学校中学年当時の家族関係において、自分を肯定されるような関係であった家庭は、現在の大学生における友人関係は良好な関わり方をし、効果的な友人観を抱くようになっていた。一方で、家族での関わりが希薄だった家庭は大学生の友人関係においても消極的で安心感を求める友人観を抱くことが明らかとなった。

キーワード：回想動的家族画、大学生、家族関係

I. はじめに

青年期はアイデンティティの模索と確立、身体的発達、性役割の意識など重要な変化がある発達段階である。青年期は友人関係にも大きな変化が起こる。岡田(2016)は、青年期は相互依存的で排他的な関係を通じて、養育者からの心理的離乳に伴う喪失感を補完・解消し、内面を共有し合う深い友人関係を通して自分を再構成する時期であるとしている。しかし1980年ごろから青年期、

特に大学生に変化が起きて、友人関係が希薄化・表面化していると言われている。千石(1985,1991)はこうした内面的友人関係を避け、友人から低い評価を受けないように警戒したり、互いに傷つけ合わないよう表面的に円滑な関係を志向したりする「現代的友人関係」傾向があると示した。つまり、青年期の若者は群れながらも、自己防衛的で周囲の人間とは深いかかわりを持たない群があると指摘している。友人関係と家族関係が対

人疎外感に及ぼす影響を対人疎外感の主観的幸福への影響を含めた検討において、友人関係の良さが対人的疎外感に負の影響を及ぼし、対人的疎外感の主観的幸福に負の影響を及ぼしている(武富,徳田,2017)とされている。

また、三宅(2012)機能が青年期危機に及ぼす影響について調査し、大学生を対象に青年期危機尺度と家族機能測定尺度を用いて「家族親和性と各メンバーの尊重と信頼が自己収縮(自信のなさや存在感の乏しさ)や自己開示対象の欠如を促し、それが神経衰弱、身体的痛み、閉じこもり、身体的疲労感、対人融通性といった種々の不適応状況を生み出している」ことを明らかにした。

動的家族画(Burns&Kaufman,1972)を用いた研究例として、母親を対象として母子関係のアセスメントとしての有効性を研究した高橋・大野(2003)の調査では、描画順位は描画者への家族への認知的構えを示しており、人物間の距離感は家族間の親密性と心理的距離を示すことを示すことが明らかになった。この調査から、動的家族画は時代に沿った家族観を反映していることがある。

久保(2000)は関係認識質問紙と回想動的家族画法を用いて、対人恐怖心性が高い群は母親に対して不信も親密も高く、父親に対しては親密、不信、怯えでより否定的であり、より交流しがたい両親像を描く傾向があることを明らかにした。つまり対人恐怖心性が高いほど、受容的な両親像や存在体験が希薄であるということである。

本研究では、小学校中学年の家族関係、特に孤独感や対人疎外感が青年期の大学生の友人関係にどのように影響するのかを回想動的家族画を用いて明らかにすることを目的としている。

II. 方法

2020年6月から12月にかけて、A県内に通う大学生7名に対して、回想動的家族画とインタビューを実施した。インタビュー項目は、【導入・基本項目】5問、【小学校中学年当時の友人関係について】21問、【小学校中学年当時の家族関係について】21問、【現在の友人関係について】26問、

【その他】2問、計75問である。

インタビュー内容を逐語録し、修正版グラウンテッド・セオリー・アプローチ(木下,2003,以下M-GTA)によって分析する。グラウンテッド・セオリーとは、データに根拠を持った理論のことで、データ対話型理論とも呼ばれており、証拠から論を産出する方法である(無藤ら,2004)。

III. 結果

回想動的家族画の分析から、肯定的な家族画にも否定的な家族画にも、身体部分の省略、背面を向いた人物、上部の線、下部の線といった特徴やスタイルは見られる。このことから、各家庭で肯定的な家族の関わり、否定的な家族の関わりのもちもあつたということである。よって、一つの家族に様々な側面があるが、家族や家が安全基地足りえたのかということは、家族が自分に対して肯定的であったか、家族の凝集性や温かさがあつたのかということになる。これらがあることで、家族が自分のことを認め、情緒的な結びつきの大切さを学ぶことができる。それが現在の友人関係でも活かされ、家族と離れていても自分で友人と良好な関係を構築し、互いに良い影響を与えながら情緒的な発達をしていくことが可能になる。しかし反対に、これらがなければ自分を認めてくれる体験がなく、現在の友人関係においても消極的な関わり方をするようになると考えられる。つまり各家庭で肯定的・否定的の両側面を持ち合わせている可能性が高いが、回想動的家族画に家族の相互作用の有無、顔の向き、シンボルから総合的に家族観を判断する傾向があると明らかになった。ここから、家族との関わりの中で自分を肯定されるような経験があることで肯定的な家族観を持つようになり、それがなければ否定的・消極的な家族観を持つようになると考える。

また、M-GTAの結果から、40概念と16カテゴリを生成した。カテゴリ相互の関係から分析結果をまとめて、簡潔に文章化し(ストーリーライン)、結果図を作成した。カテゴリ1、2を上位カテゴリとして《小学校中学年当時の肯定的な家族観》とした。カテゴリ3、4を上位カテゴ

リーとして《小学校中学年当時の否定的な家族関係》としている。カテゴリ5、6、7を上位カテゴリとして《小学校中学年の友人関係》としている。カテゴリ10、13、14を上位カテゴリとして《現在の友人との関わり方》としている。カテゴリ11、15を上位カテゴリとして《効果的な友人観》とした。カテゴリ12、16を《安心感を求める友人観》とした。以下、概念を『』、カテゴリを【】、上位カテゴリを《》と表記している。

M-GTA の分析から、肯定的な関わりがあった家庭と家族としての関わりが少なく放任主義的な関わりであった家庭では、それぞれ現在の友人との関わりや友人観に影響を及ぼしていることが明らかとなった。

『話を聞いてくれた』など『家族の肯定的な関わり』があった家庭は、【現在の友人との関わり方】において、『友人の話を聞く』など『小学校中学年当時親がしてくれたことをする』ような関わり方になっていた。当時親や家族からよく話を聞いてくれた人は、それが嬉しいことだった、それで自分の情緒が育ったと感じており、今度はそれを親しい友人にしようとしていることも確認された。これは当時と比較して情緒的にも『発達、成長』したため可能になったことと言える。また当時親から言われていた約束事なども、現在も継続して行っていることから、自分がされて嬉しかったことを同様に友人に返すようになるだけでなく、当時から習慣化されたことや、その行為の重要性を理解すると意図的に継続していた。

一方『個人行動・単独行動』が基本で【家族との関わりが少なかった】家庭は、現在【消極的・拒絶的な友人との関わり】をするようになっています。このような関わり方は、自分と関わる人物全員ではなく、『気が合わない人への対処』の仕方であったり、積極的に友人と関わろうとしなかったりすることを示す。これは『人は人、他人は他人』という考えに起因すると推測した。小学校中学年という家族との情緒的なつながりが大切である時期に、家族としての凝集性がなく互い

に関心も薄いような状況だったのである。今回の調査協力者には、児童期虐待を受けていた人はいなかったが、否定的・消極的な家族観を抱いていた人は、情緒的な結びつきの重要性が実感できず、現在は必要以上に人との接触や関わりを持たないようになったのではないかと推測される。このような友人関係であると、人と関わることは緊張感があることであることが予想され、仲が良い友人には緊張感がなく関われるため、『安らぎを求める友人観』を抱くようになる可能性が示唆された。また当時の家族関係の中でも、否定されたくないという思いがあり、現在も同様に『否定しない友人』、自分に安らぎを与える友人を求めている。

以下に示すのが M-GTA の最終的な結果となるストーリーライン及び結果図 (図 1) である。

IV. 考察

調査の結果、肯定的な家族の関わりや感情があると、現在の友人との関わり方は『友人の話を聞く』など、『小学校中学年当時の親がしてくれたことをする』ような関わり方になる。反対に家族としての関わりが乏しく、放任主義であった家庭では、現在【消極的・拒絶的な友人との関わり】をするようになっている。M-GTA の考察から、当時の家族関係や家族観が現在の友人との関わり方、特に友人観に影響を及ぼすことが明らかとなった。また小学校中学年当時の家族観は回想動的家族画のシンボル、顔の向き、家族の相互作用の有無から判断していることも分かった。しかし、現在の友人関係は、当時の親の関わり方、家族観だけではなく、当時の友人関係、友人観、さらに中学生や高校生に進級・進学した後の友人関係が友人と関わり方に直接的な影響を与えていた。また小学生と中学生からは様々な状況が一変し、生徒数が増えたり新しいクラスメイトができたり、部活に所属して先輩ができたりする。この時に、周囲の変化に順応できるように、友人との関わり方、自分の性格を変容させていく。その時に学んだことが、現在までの友人関係の形成に情報や経

験として活かされるようになると考えられる。つまり、現在の友人観の強く影響を与えているのは当時の家族観や関わりであり、現在の友人との関わり方は当時やその後の友人観や友人との関わり方に強く影響されている。そして回想動的家族画の解釈とも照らし合わせて、何が要因となって

現在の友人観に影響を与える家族観が形成されるのか考察した。その結果、【効果的な友人観】を持つ人物、つまり肯定的な家族観を持った人物の回想動的家族画には、家族の相互作用、家族に暖かさを示すシンボル、肯定を示す正面を向いた人物像が多くみられる、

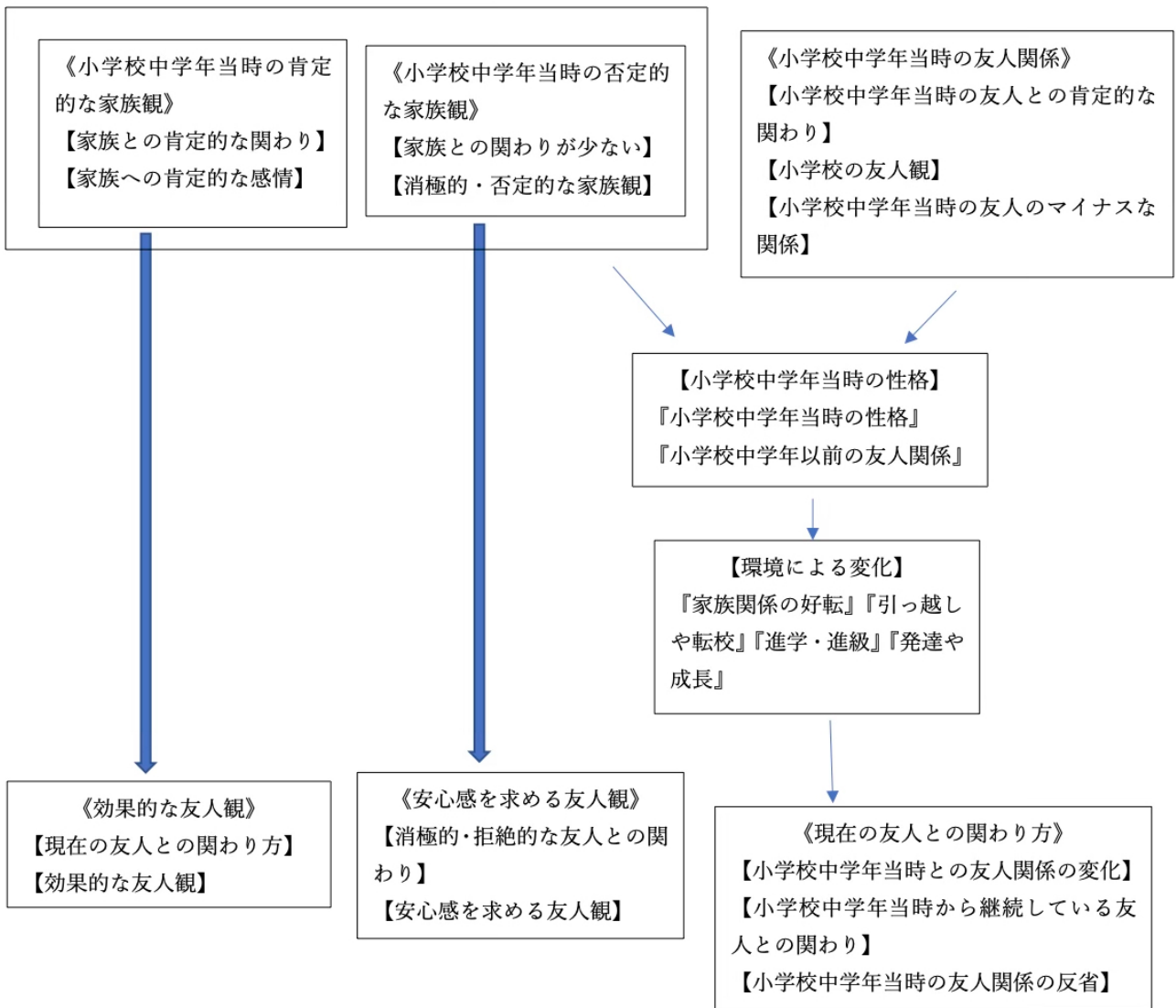


図 結果図

家族全員が同じ空間にいるという傾向があった。逆に、【安心感を求める友人観】を持つ人物、つまり否定的・消極的な家族観を抱いていた人物の回想動的家族画には、家族の相互作用は少ない、顔が横、もしくは背面の人物像が多くみられる、そもそも一緒に空間の描かれてないという特徴があった。どちらの回想動的家族画にも包囲や区分化、身体部分の省略が見られた。これはその家族に肯定的な作用、否定的な作用どちらも持ち合わせていたということになる。様々な側面がありながらも、最終的な家族観を判断する要素は、家族の凝集性の中で自分を肯定してくれる存在がいて居心地がよかったかどうかということになる。一緒にいる時間は多くはなかったとしても、親が仕事の関係上忙しくて関わる時間が少なかった家庭は少なくなかったが、その中で自分を認めてくれるような関わりがあると家族観は肯定的なものとなる。逆に関わる時間が本来少なくなかったはずが、個人行動する家族であると自分を認めてくれる行動が少なくなり、家族という意味やメリットを見いだせなくなることも明らかとなった。家族に対する印象にも抱いていた家族観を判断することができ、凝集性がなかったり、かろうじて家族の形をとっているといった印象になったりすると、否定的・消極的な家族観になる傾向も見られた。

三宅(2012)は児童期の家族の不機能が青年期の心の葛藤への影響を通して間接的に、青年期の不適応に影響を及ぼし、「家族親和性」と「各メンバーの尊重と信頼」は自信のなさや存在感の乏しさや「自己開示対象の欠如」を促し、それが「精神衰弱」「身体的痛み」「閉じこもり」「身体的疲労感」「対人的融通性」といった種々の不適応状況を生み出している、とした。本研究の当時の消極的・否定的な家族関係は現在の友人観に影響を与えるという点では三宅(2012)と一致しているが、不適応状態を示すまではいかず、自分が所属するコミュニティの中で自分に合う友人とのみ仲を深めて心の安定を求める友人観を持っていることが示された。

本調査では、家族に対しての反抗期がある思春期より以前で、幼児期の影響を受けないようにするため、中学年の時期を限定した。実際に高学年から家族に対する反抗期を本格的に迎えたり、引越して環境が変化したりしたため中学年という時期を限定したことの一定の効果はあったように見られる。しかし二森・石津(2016)が指摘したように、親の養育態度によって反抗期を迎えない子ども、反抗を必要がない子どもも近年増えてきたと言われている。今後の家族に関する調査は親の養育態度や自身の反抗期の有無を確認する必要がある。

以上の結果から、小学校中学年当時、家族から自分を肯定されるような関わりがあった家庭は、一緒にいる時間が少なかったとしても肯定的な家族観を抱く。肯定的な家族観を抱いていると、大学生になると互いに良い影響を及ぼし合うような効果的な友人観を抱くようになる。一方、小学校中学年当時、家族との関わりがなく放任的であると、否定的・消極的な家族観を抱くようになり、大学生になっても友人から否定されることを恐れ、安心感を求める友人観を抱くことが明らかとなった。

引用文献

- 木下康仁 2003 グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 一質的研究への誘い 弘文堂
- 久保恵 2000 対人恐怖心性と認知的・投影的親子関係像—内的ワーキングモデルの観点からの検討 教育心理学研究 48 182-191.
- 三宅義和 2012 家族機能が青年期危機に及ぼす影響について 神戸国際大学紀要 83 1-7.
- 二森優希・石津賢一郎 2016 第二反抗期経験の有無と過剰適応が青年期後期の心理的自立と対人態度に与える影響 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要 教育実践研究No.11 21-27.
- 岡田努 2016 青年期の友人関係における現代性とは何か 発達心理学研究 4 346-356.
- 千石保 1985 現代若者論：ポストモラトリアムへ

の模索 東京：弘文堂

千石保 1991「まじめ」の崩壊：平成日本の若者たち 東京：サイマル出版会

杉浦守邦 2002 ヘルスカウンセリングの進め方 3 心理テストの進め方・読み方バウムテスト・家族画 (KFD)・エゴグラム・好き嫌い

テスト 東山書房

高橋正泰・大野博之 2003 回想動的家族画テスト (KFD) に見られる母親の描画特徴と心理特性：母子関係アセスメントとしての有効性の検討 九州大学心理学研究.4 279-285.